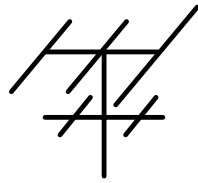


子育てチャンネル



子どもの声に耳を傾けて

東川小学校教頭
寺口 悟
SATORU TERAGUCHI

前任校での話である。養護教諭が、全校児童と教職員の似顔絵を描いて廊下に掲示した。似顔絵の下には名前が書いてある。それを見た一年生のA児が、「サトルってだれだ?」と聞いた。「教頭先生だよ。」と養護教諭が答えると、一年生は、「ふん、教頭先生は、キョウトウ サトルっていつのか。」と言ったそうである。おわかりいただけただろうか。A児は、私の名前を「キョウトウ」だと思っていたのである。

子どもの伸びやかな表現は、なんとユーモラスで心を和ませてくれるのだろう。

ここでA児に向かって、「何を言ってるの。」などと言ってしまつと、この子ももっている自由奔放な表現力は失われてしまう。子どもは、知りたいことや不思議なこと、伝えたいことがいっぱいある。そのぶん、口数は多くなり騒がしくなる。親は、早く大きくなり、静かになってくれないかと願う。しかし、表現の未熟な子どもはおもしろいのだ。子どもの年齢はすぐに上がり、表現のおもしろさは失われ、生意気になる。

道新にも、「子ばなし」という子どもたちのおもしろい表現が載っている。子どもの行動に注意を向けていけば、子どもにまつわる楽しい話はあちらこちらに転がっている。

では、自分は、ユーモアあふれる言動を受け止めるゆとりと感性をもって子どもに接してきたのであるうか。忙しさにまかして、聞き流したり、空返事はしていなかっただろうか。実のところ、私には自信がない。

子どもたちに、教えておかなければならないことがある。それは、自分の思ったことをそのまま口に出してはいけない場合があるということだ。子どもの多様な表現を認めながらも、悪口のように、相手を傷つける言葉を発することは、厳に慎むように育てなければならぬことである。

子どもは(大人もそうであるが)、他人に厳しく、自分に甘いものである。かつて、保護者に、「お子さんは、はっきり考えを言うのはすばらしいのですが、もう少し穏やかに言うように育てましよう。」と伝えられたことがある。大多数の保護者は、「家庭でもお願います。」と応えてくれる。びっくりするのは、「どうしてでしょうね。家ではそんなことないのに。」とか、「いつも注意しているんですけど、あの子は言うことを聞かないのですから。」と言われるときである。

なにも、育て方が悪いと言っているのではない。相手の痛みがわかり、思いやりの表現がで



寺口 悟(てらぐちさとる)
東川小学校教頭
昭和51年より教頭として勤務
二男一女の父親で子どもは成人し、現在は妻と二人暮らし。

きる子に育てましよう。と言っているのだ。教師を含めた大人たちの、これからの育て方を相談しているのだ。

私には三人の子ともがいる。すでに、三人とも成人していて、子育てと言われるものは終わつたと思っている。今にして思えば、こうしてやれば、あれをさせておけば...と思うこともあつたが、その時々では最善の対応をしてきたつもりである。

子育てが終わつたから言うのではないが、手のかかるころの

子どもは、愉快でユーモアにあふれる存在である。そんな微笑ましい姿を見せてくれる期間はそんなに長くない。すぐに子どもは大きくなる。子どもの声に耳を傾けて、愉快な話には一緒に笑ってあげる。気になる表現には、「そんなふうには言ったら、相手は傷つくと思うよ。」と注意を促してあげる。このような生活を繰り返すことで、他人への思いやりをもちながら、自分の考えをはっきりと表現できる子が育つのだと思う。